

モンゴル国の番組「モンゴルの100年の歴史を創った100人の女性たち」の中のE.チメッドツェレン

今岡良子

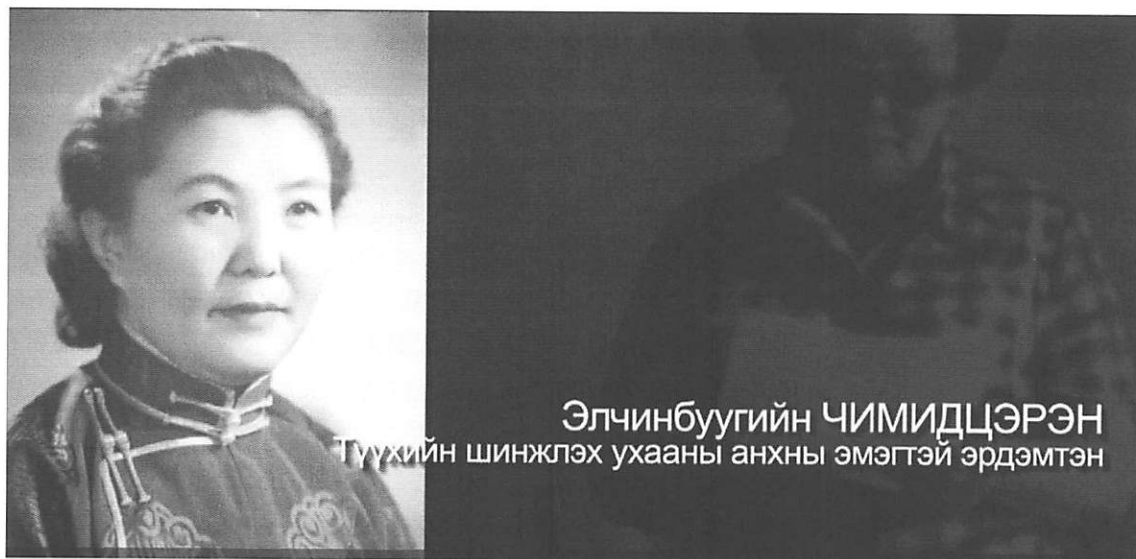
はじめに

「アジア現代女性史」の14号の研究ノートの冒頭で¹、筆者は、2020年9月末、ウランバートルのJ.ボルから、モンゴル国営放送が、“Зууны 100 эмэгтэйчүүд”という番組を作っていて、自分の母で、モンゴルの女性史研究者のE.チメッドツェレンも選ばれたこと、筆者に動画で参加して欲しいこと、放送された番組は評判よく、動画ファイルが手に入ったら送るというメッセージがあることを書いた。

筆者は、その動画を待ち続けた。J.ボルは、何度も番組のプロデューサーに連絡してくれた。動画のURL情報を得たのは、2021年12月末であった。番組のタイトルは、「E.チメッドツェレン 歴史学の最初の女性学者」である。

この研究ノートでは、その番組の概要、そこで語られた教育者としてのE.チメッドツェレン、研究の特徴についてまとめ、筆者自身の疑問が解決したこと、新しい発見などを書いておきたい。

写真1 E.チメッドツェレン 歴史学の最初の女性学者



出所「モンゴルの100年の歴史を創った100人の女性たち」番組より

¹今岡良子 (2020) 「2つの三世代の『秘史』 E.チメッドツェレンの『三世代の歴史』と息子のJ.ボルの『私の母 思い出』」、「アジア現代女性史 第14号」、110頁

(1) 「モンゴルの100年の歴史を創った100人の女性たち」の番組概要

“Зууны 100 эмэгтэйчүүд” という番組名は、動画を見た後、「モンゴルの100年の歴史を創った100人の女性たち」という訳をつけることにした。また、以下「100人の女性たち」と略して書くことにする。すでに十数本が Youtube にアップロードされているが、E.チメッドツェレンの動画は、1月末現在、まだ上げられていない。

この番組の制作は、J.ボルから最初、国営放送と聞いたが、動画に書かれていたのは、NGO「世界のモンゴル、女性とともに」代表（写真2）で、「100年の100人の女性たち」プロジェクト企画者 D.エンフジャルガルの制作で、「社会民主主義 モンゴル女性連盟」（写真3）とエルデネット社（写真4）の共同制作と書かれていた。番組の趣旨は、1921年から2021年の100年の間に活躍した女性を紹介することである。すでに、モンゴルの近現代史に貢献してきた人物紹介の番組はいくつか作られてきたが、女性に限定した番組としては初めての取り組みである。

写真2



写真3



写真4



写真2 NGO「世界のモンゴル、女性とともに」のロゴ

写真3 「社会民主主義 モンゴル女性連盟」

写真4 エルデネット社のロゴ

出所「モンゴルの100年の歴史を創った100人の女性たち」番組より

番組の構成は、企画者の D.エンフジャルガルが進行役を務めながら、今も歴史の研究を続けている著名な学者であり、E.チメッドツェレンの弟子である4人が、恩師の思い出を語り、その動画を見た現役の歴史の教諭2人が教訓として学んだことを語ることで、ひとまとめとなり、また、企画者と弟子が恩師について語り、それを2人の教諭が語る、というように進んでいく。番組の長さは25分であった。

4人の弟子というのは、E.チメッドツェレンと同じモンゴル国立大学歴史学部に勤める女性の研究者2人、D.エンフツェツェグ（モンゴル国立大学の歴史学部准教授）と J.オランゴア（モンゴル国科学功労賞受賞者、歴史学博士、モンゴル国立大学歴史学部教授）、そして J.ボルドバートル（モンゴル国科学功労者賞受賞者、アカデミー会員）、J.ゲレルバドラフ（モンゴル国立教育大学歴史学部教授）である。企画者の D.エンフジャルガルと D.エンフツェツェグ准教授の対話が軸となって、E.チメッドツェレンのライフヒストリーを紹介し、他の3人が語る思い出が挿入されていく。D.エンフツェツェグ准教授は、2019

年に筆者がインタビューした人である。その時に得られなかった答えが、ここでわかりやすく語られていたので、感無量だった。

コロナ禍が明けて、モンゴル国に行きやすくなれば、この番組の企画者や出演者に直接会って、さらに詳しく話を聞きたいと思う。

(2) 弟子が語る教育者としての E.チメッドツェレン像

(2.1) D.エンフツェツェグへのインタビューのまとめ

写真5 企画者 D.エンフツェツェグ (NGO「世界のモンゴル、女性とともに」代表) と D.エンフツェツェグ准教授 (モンゴル国立大学の人文学部歴史学科)



— チメッドツェレン先生は、1924年にドルノド県に生まれ、1930年代は地元の小中学校に入学し、1940年代に師範学校で学び、故郷に帰り、モンゴル語の教員として働くことになったそうです。戦争の大変な頃、生徒たちと一緒に壕を掘ったり、(県庁所在地に隣接する) バヤントゥムン郡が爆撃された時、そこにいたと話しておられました。1953年にモンゴル国立大学の歴史学科を卒業し、歴史の専門家となりましたが、1年間、モンゴル人民革命党中央委員会で働き、そのあと、モンゴル国立大学の歴史学科の教員として正式に働くことになりました。

筆者は、E.チメッドツェレンが、ハルハ川戦争を経験していたことは、初めて知った。

写真 6 1957 年 モンゴル国立大学の歴史学科の教員同僚と



前列、左から 5 番目の白いコートを着ているのが、E.チメッドツェレン

- チメッドツェレン先生は、モンゴル国立大学の歴史学科で、学生として、教員として、学科主任として、特任教員として 40 年以上の年月を過ごされました。
- 私は 1970 年の終わりから 1980 年の初めにかけて、モンゴル国立大学で学んでいましたが、その時、チメッドツェレン先生は歴史学科の主任で、歴史学博士でした。

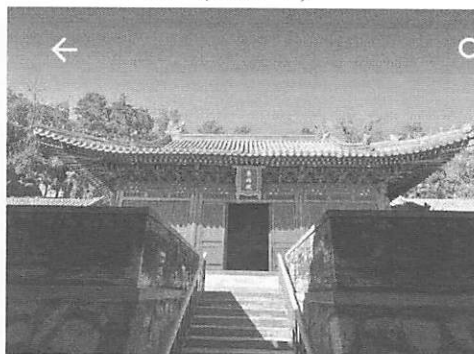
(2.2) J.オランゴアへのインタビューのまとめ

写真 7 J.オランゴア (モンゴル国立大学歴史学部教授)



- チメッドツェレン先生は、女性としても素晴らしい人でした。モンゴルから中国の北京大学の博士課程に留学した数少ない学生の 1 人で、私の父ジャムスレンと一緒に博士号を取得して、帰国しました。

写真8 留学中のL.ジャムスレンとE.チメッドツェレン²の写真 (1962年)



Fahai Temple

4.7 ★★★★★ (22)

中華人民共和国 北京の仏教寺院

— チメッドツェレン先生の授業を受ける、ゼミに参加できるというのは、学生として非常に光栄なことでした。先生の授業は素晴らしかった。当時、中国語の文献を読める人は少なかったので、履修生は貴重な講義を聞くことができました。

— チメッドツェレン先生は、モンゴルの現代史上有名な女性のライフヒストリーを聞く調査をしていて、私にもご自宅に行って、聞き取りをする機会を与えてくれました。医師のデンスマー³、オユン⁴という有名な知識人女性に会って、お話を聞くことができました。

— 卒業後、先生について、国際モンゴル学者会議に参加しました。当時、若い教員が、そんな大きな学術会議に出ることは極めて稀でしたが、先生は、「こんなたくさんの資料を集めたのだから、二人で共同して、発表を準備しましょう」と言って参加の機会をくださいました。‘Монголын нэгэн эмэгтэйн хоёр нийгмийн амьдрал’ (モンゴルのある女性が経験した二つの社会) というテーマで 1984 年⁵に初めて国際モンゴル学者会議で発表しました。それ以来、学者というのはどうあるべきか、教育者とはどうあるべきか、私はいつも先生という目標に、追いつこうと努力してきました。先生の功績は、そういう弟子たちをたくさん研究者として育てたことです。1957年から 97、98年まで 40年間教壇に立っておられたので、モンゴル国立大学の社会歴史学科で学ぶ学生は直接指導を受け、その後の世代は著作を通じて学ぶことになりました。

² 中国語専攻の複数の同僚によって、北京市の法海寺ではないか、と推察された。

³ D.デンスマーは、前夫ヤダムスレン、夫 G. サンボーが肅清の対象となり、その家族として投獄された。

⁴ E.オユンは、1918年生まれ。チョイバルサン賞受賞作家、演出家、翻訳家、父エルデネバトハーンは、ドイツのスパイであるとの容疑をかけられた後、行方不明。

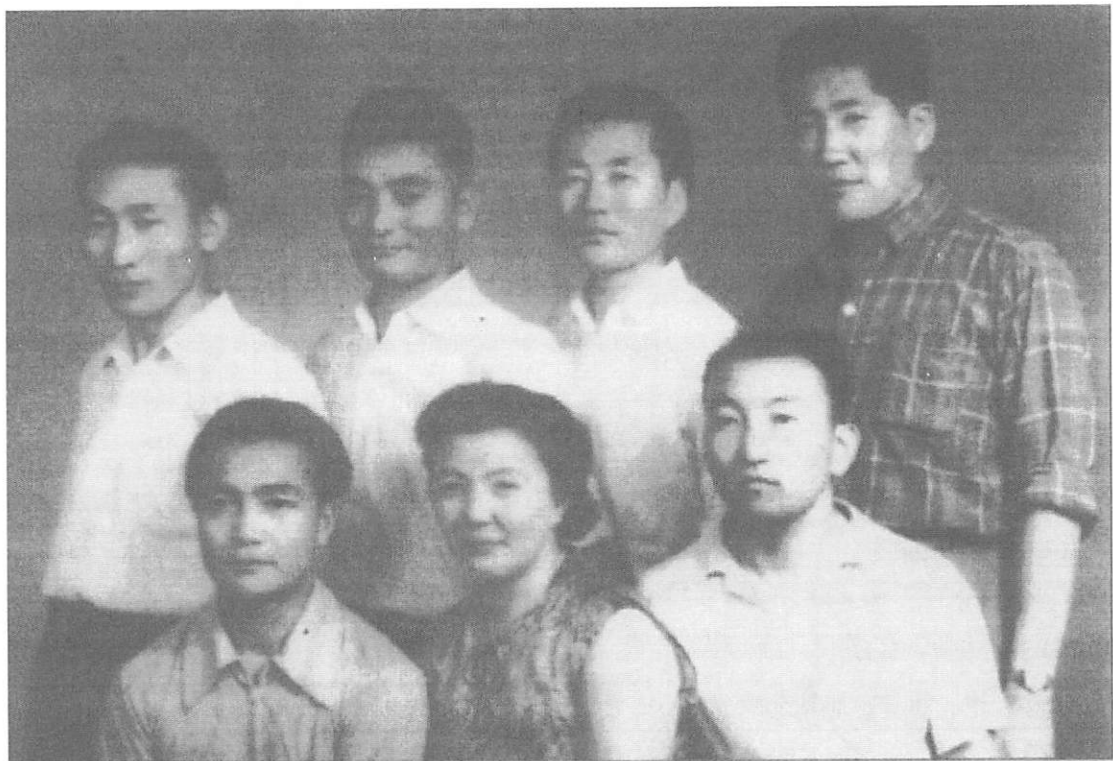
⁵ 1984年には国際モンゴル学者会議は開かれていないので、ドイツで行われた国際アルタイ学会か、1982年に開かれた国際モンゴル学者会議の可能性もある。

モンゴル国の番組「モンゴルの100年の歴史を創った100人の女性たち」
の中の E.チメッドツェレン

ここで J.オランゴアが聞き取りを任されたという D.デンスマーは夫が、E.オユンは父が
粛清されたという共通点がある。他にもこの聞き取り調査の対象になった女性がいたはず
である。E.チメッドツェレンが粛清について書いた文献は見当たらないが、聞き取り調査
は行っていたことがわかる。そのことを J.オランゴアに直接会って、確認したい。

写真9 「モンゴルの7人の歴史研究者」

モンゴル人民共和国から中華人民共和国に留学させた7人は、中国語文献を扱える歴史
の専門家として養成された。前列左から G.スフバートル、E.チメッドツェレン、N.イシジ
ャムツ、後列、Ch.ジュグデル、L.ヤダムスレン、Ts.サンジャースレン、L.ジャムスラン (J.
オランゴアの父)



Зүүн гар талаас нэг дэх эгнээ: Г.Сүхбаатар, Э.Чимэдцэрэн, Н.Ишжамц, Хоёр дахь эгнээ: Ч.Жүгдэр,
Л.Ядамсүрэн, Ц.Санжаасүрэн, Л.Жамсран.

出所 Web ニュース Sonin Монгол түүхийн долоо

<https://sonin.mn/news/culture/46193>

(2.3) J.ボルドバートルへのインタビューのまとめ

写真 10 J.ボルドバートル (モンゴルアカデミー会員)



— チメッドツェレン先生は、たくさんのモンゴル人の歴史学者を育てた恩師です。モンゴルの歴史家の中で、また女性の中で、先生のことを思い出さない人はいないと思います。そして、モンゴルの女性の運動、その歴史を研究した唯一の研究者です。

— 私は、大学の1年の後期から3年の終わりまで、モンゴルの歴史の授業で、最初から人民革命のところまで教えてもらいました。歴史学者のジャンバルスレンと私は、先生に直接指導をしていただいたことで、学者になることができました。チメッドツェレン先生がイギリスのリーズ大学に教えに行っている半年の間、モンゴル語とロシア語専攻の学生の歴史の授業を先生に代わって教えていました。女性が憧れ、女性の代表となる大学教員と言えば、チメッドツェレン先生以外には、他に誰がいるでしょうか。本当に美しく立派な先生でした。

— 学生と一緒に新しい知見を探究することを大事にした先生でした。

この発言の後、J.オランゴアが知識人女性のインタビューの機会を与えられた映像に切り替わった。

J.ボルドバートルは、ソ連のグラスノスチ（情報公開）政策の影響を受けて、モンゴル人民共和国で古文書館などの極秘資料にアクセスできるようになり、それを元に粛清の時代を明らかにした歴史学者である。誠実で、寡黙な人格なので、国民的に信頼されている。2022年1月にU.フレススフ大統領から「人民の教師」という称号を与えられた。⁶ その人が、母を恋しく思うような表情で語った一つ一つの言葉には重みを感じられ

⁶ <https://gogo.mn/r/dnwq6> Академич Ж.Болдбаатар Ардын багш боллоо

た。J.オランゴアからインタビュー調査について聞いた後、J.ボルドバートルと意見交換したいと思う。

(2.4) J.ゲレルバドラフへのインタビューのまとめ

写真11 J.ゲレルバドラフ（モンゴル国立教育大学歴史学部教授）



— 私は、1987年にモンゴル国立大学社会学部歴史学科の学生で、チメッドツェレン先生はモンゴルの中世の歴史を教えてくださいました。先生は教養が高く、多くの外国語に通じておられました。私たちに話す時に、ロシア語ではこう言います、英語ではこう言います、中国語ではこう漢字で書きますと3カ国語を板書して説明してくれる先生でした。一方、ゼミの指導は厳しかったです。お年を召しておられましたが、非常に熱心に教えてくださいました。特に、歴史を専攻するには、外国語をしっかり身につけなさい。特に、モンゴルに関する中国語の文献はたくさんあります。しかし、読む時は、帝国時代の資料などは、文字通りに受け止めてはいけません。その背景を自分で調べて、よく確認しないとはいけません。モンゴル人のしたことを誇張したり、モンゴル人を見下したり、いろんな思いをこめて外国人がその言葉を知る人に向けて書いているからです。

D.エンフツェツェグに会った時、E.チメッドツェレンのゼミの指導は厳しかったと語っていた。ここで興味深かったことは、E.チメッドツェレンが、中国で留学中に、モンゴルという民族的アイデンティティを持ち、漢語資料に対するリテラシーの力を高めていた、ということである。モンゴル人民共和国に戻り、古文書館で読むモンゴル語の文献に向かう時にも、「文字通りに受け止めてはいけません」と考えていたに違いない。

(3) D.エンフツェツェグが語る E.チメッドツェレンの研究の特徴

E.チメッドツェレンの研究の功績について企画者の D.エンフツェツェグは、3冊の本を取り上げ、D.エンフツェツェグが説明する。その説明の一部不正確な情報は訂正した上で、ここに整理しておきたい。

1冊目は、1969年発行の“Монголын эмэгтэйчүүд шинэ амьдралын замд(1921-1931)”、『モンゴル人女性は新しい生活に』というタイトルで、これは、全部で48ページ。

D.エンフツェツェグは、1921年の人民革命やその後1931年までの社会建設に積極的に関わった女性について、新聞や雑誌、手記や資料にもとづいて書かれたものと紹介した。画面では大きく取り上げられたが、ポケットサイズの小さな冊子である。

2冊目は、1973年発行の“БНМАУ-д эмэгтэйчүүдийг нийгмийн дарлалаас чөлөөлсөн түүхэн туршлага”『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』というタイトルで、これは、全部で239ページ。代表作である。筆者が「アジア現代女性史」の創刊号から紹介してきた文献である。

D.エンフツェツェグがこの文献について語ったことを整理すると次のようになる。

— チメッドツェレン先生は、20世紀を迎える前に遊牧民女性がどんな状況に置かれていたか、女性が家族の中で一定の役割を持つ以外に、政治や社会の中で役割を担って活動することはできず、様々な障害があったことを資料にもとづいて書いています。

— 政治のリーダーや家族の長が男性であっても、遊牧民の女性たちは、共同体の中で役割を果たし、その中で経済活動も行ってきた。家畜から畜産物をえて、物を作る原料に加工する労働は女性たちが担い、牧畜の家族経営を支えてきたことは明らかです。この伝統をもとに、1921年の人民革命後、遊牧民女性は、新しく生まれた工業部門、運輸や通信、銀行や金融、農耕など、新しい産業部門の専門化された全ての分野に男性とともに参加し、能力を発揮した。それは、モンゴルの女性の歴史の中で、新しい発展段階に達する変化であったと書いています。家族や社会の中で女性の活動を制限する要因を取り除き、権利としての自由を手にするにとどまらず、女性自身が家族、子ども、母性を保護し、社会福祉を実現するために組織を作り、女性がリーダーとして活躍したことも、資料にもとづいて書いています。また、20世紀は、科学やそれにもとづいた近代的な文化を享受する時代となり、モンゴルの女性も教育を受け、科学や近代的な文化を享受し、教員、医師、役者、学者という知識人も生まれていきました。

3冊目は、1983年発行の“Монголын эмэгтэйчүүдийн мэдлэгийн уламжлал дэвшлийн зарим асуудал”『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』というタイトルで、これは、全部で94ページ。これは筆者が「アジア現代女性史」13号の研究ノート「E.チメッドツェレンの最後の著書（モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題）を再考する」で紹介した文献である。

D.エンフツェツェグがこの本について語ったことを次に整理しておきたい。

— チメッドツェレン先生のもう一つの研究の特徴として、モンゴル人女性が、伝統的な遊牧の知識と経験を持っていることを重視したことにあります。モンゴル人は、遊牧という文化、知識や経験を持っている点で、他の民族と違う特性を持っていて、遊牧は世界の文化遺産としても評価されている。その遊牧文化の多くを遊牧民女性が生み出していることをチメッドツェレン先生は大事にしたいと考えたのです。

— 1970年代の終わりから1980年にかけて、チメッドツェレン先生は、志を一つにする女性たち、特に、若い教員と一緒に、また、学部の上回生と一緒に、今で言うと、教授を筆頭にしたプロジェクトの調査チームのような規模の大きなチームを組織し、遊牧の伝統的な知恵や経験に関する調査を行いました。古文書館の資料やインタビュー、手記などからも情報を収集し、また地方に出かけ、遊牧民の家で女性がどのように暮らしているのかを調査し、一冊の本にまとめて出版しました。この本では、アーロールやエーズギーを乾燥させて作る方法、乳酒を発酵させる方法、乳製品を作る方法が書かれていて、モンゴル人の知識と経験には科学的な技術があると述べています。

— チメッドツェレン先生は、さらに続けて、遊牧民女性たちの第二の知識と経験として、縫う、刺繍する、フェルトを作る、デールを作るなど、衣服を作る技術について調査をしようとしていましたが、その部分は完成させることができませんでした。

— しかし、社会歴史学科の事務局の秘書をしていたアジーマーという方が、その後もこの研究を続けようと思ったのでしょう、モンゴル人女性の靴の作り方という小さな本を一冊出版しました。その後、デールの作り方という本も出版しました。今は、帽子の作り方の本を準備しているそうです。チメッドツェレン先生の調査チームに参加していたので、先生の意志を引き継いでおられるのだと、私は思います。

筆者はこの発言を聞き、ようやく納得することができた。この本については、前号の研究ノートに「まず、第1章と第2章が50ページずつ書かれているにもかかわらず、第3章は8ページしかなく、非常にバランスの悪い章立てとなっている。第2章の芸術文化のところ、第1章の4.にまとめておくべき、フェルトの敷物や刺繍や織物などが14ページも使って書かれている。次に、章の表題と中身が必ずしも一致せず、E.チメッドツェレンが遊牧民女性に伝えたいことを中心に書かれている。」⁷と書いたが、不完全のまま、出版されたことがようやくわかったのだ。

筆者は、12月末にこの番組の動画を見た後すぐに、E.エンフツェツェグにメールを送り、アジーマーについて問い合わせたが、1月中旬にようやく返事が来た。返信には、アジーマーは70歳を越えていること、その2冊の本が手元にあるので、郵送しようか、と書かれていた。ウランバートルにいる卒業生に頼んで、コピーして、PDFにして送ってもらうこ

⁷ 13号 「E.チメッドツェレンの最後の著書（モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題）を再考する」 P.96

とにした。

そのアジーマーの本を読んだ上で、誠に僭越ながら、三つ目の本を E.チメッドツェレンが作りたかったように、筆者がやってみようかと思う。100 年後のモンゴル人が、あるいはモンゴル人でなくても、遊牧の知識や経験に興味を持つ人が、それを読んで、実践できるような本を作りたい。いや、遊牧の研究をしてきた筆者が作らなければならないと思う。E.チメッドツェレンのこの著作は、伝統的な知恵と経験がどのようなものを説明しているが、科学の言葉で説明する内容になっていない。例えば、乳製品の加工の工程は詳しく書かれているが、材料となるミルクがどのような成分になっているかが書かれていない。ミルクの温度、気温や湿度がどのような状態で、その加工技術が成り立つのか、ということも書かれていない。逆に、そこを工夫すれば、100 年後でも、どこでも、誰でも遊牧文化の担い手になれる本になるだろう。

アジーマーが研究を引き継いでいるという話の後、D.エンフツェツェグは次のように語った。

— オランゴアと私は、“Монгол хатад” 『モンゴルの王妃』という中世の 20 人の妃を研究した本を 2000 年に出版し、自分は 2008 年に “Монголын нууц товчоо ба эмэгтэйчүүд” 『モンゴル秘史と女性』という本を英語とモンゴル語で出版し、また、ボグド・ハーンの妃ドンドグドラムについて書いた。こうして、チメッドツェレン先生と異なっているけれども、女性の歴史の研究をしてきたという点で恩師の仕事を受け継いでいます。

ここで、「先生と異なっている」という発言を解説しておきたい。D.エンフツェツェグは、この番組の中で、“БНМАУ-д эмэгтэйчүүдийг нийгмийн дарлалаас чөлөөлсөн түүхэн туршлага” 『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』というタイトルを述べる時、‘чөлөөлсөн’（解放した）という言葉をやつくり強調して発音し、その時代は「女性を解放した」という表現を使ったことを印象付ける話し方をした。それは、筆者が 13 号の研究ノート⁸にすでに書いたように、「『解放』も、当時のマルクス・レーニンの教義に当てはめて使っていたに過ぎず、王妃から一般の遊牧民女性に至るまで、奴隸的な扱いを受けていたとは考えにくい」という考え方に立っていた。二人の女性研究者は、階級的視点を排除した研究をしてきた点で「先生と異なる」ということである。しかし、E.エンフツェツェグは、このインタビューの中で「抑圧」という言葉は何度も使っている。「抑圧」はあったけれども、そこから自由になることは「解放」と呼ばないのだろうか。

(4) E.チメッドツェレンの平和のための女性の国際的な活動

企画者エンフジャルガルは、E.チメッドツェレンが女性の代表として国際的な平和会議

⁸ 前掲、P.94

に出席し、国際的な連帯に貢献したことに触れ、D.エンフツェツェグが説明し、そこに外国で記念撮影された写真が挿入される。改めて会議名などを調べ、訂正したものを整理すると次のようになる。

- ・1955年、インドのデリーでアジア諸国民会議が開かれ参加した E.チメッドツェレンは、世界の女性も、モンゴルの女性も平和への思いは同じであることを訴えた。
- ・1965年、フィンランドのヘルシンキで世界平和評議会 (WPC) が開かれ、E.チメッドツェレンは参加した。この会議は、ベトナムでの全ての米軍の撤退をアピールしたが、その後、E.チメッドツェレンは、ベトナム女性組織との交流を深めていく。
- ・1969年、ベトナムで開かれた国際会議⁹に参加した。その会議でベトナムの女性組織代表と意見交換していると思われる写真が、番組の動画に挿入されている。残念ながら説明はない。

— 国際会議では、短期間の間にアジアの小さな国モンゴルで、女性を社会的抑圧から解放することに成功したことに注目され、アジアのモデルと言われた。モンゴル人女性が、社会で活躍する時、家庭の中の様々な障害をどのように解決していったか。男性と同じようにどのように社会で活躍していったか。女性の問題を解決する時に、女性自身が組織を作り、重要な役割を果たしたという歴史も発表したとチメッドツェレン先生から聞きました。

— モンゴル女性連盟は積極的に政策提言をまとめ、モンゴル人民革命党政府に一定の影響を与えてきた。チメッドツェレン先生は、その女性連盟の事務局長として具体的な政策提言を検討し議論し、まとめ提出するという責任ある仕事を担当したと聞きました。



写真 12
 E.チメッドツ
 エレンの寄稿
 「英雄的な友
 達の国で」
 「統一」紙
 1969年7月24
 日

⁹ この国際会議の名前がわからない。1969年7月24日のベトナムの新聞「統一」にE.チメッドツェレンの写真入り記事が掲載されている。近藤美佳氏（大阪大学言語文化研究科助教）に確認していただいたところ、この記事には国際会議の名前は書かれていなかった。アメリカの戦争の非道とベトナム人民への連帯表明、そして、自分も一人息子を育てる母で、平和を願う一人の人間であることが書かれている。また、この年、アジア仏教徒平和会議がウランバートルで開催され、ベトナムからも参加者があったと考えられる。

写真 13 1955 年インドのデリーで開かれたアジア諸国民会議に参加



写真 14 1955 年インドのデリーで開かれたアジア諸国民会議に参加
前列左から 3 番目のバッグを持った女性が E.チメッドツェレン。



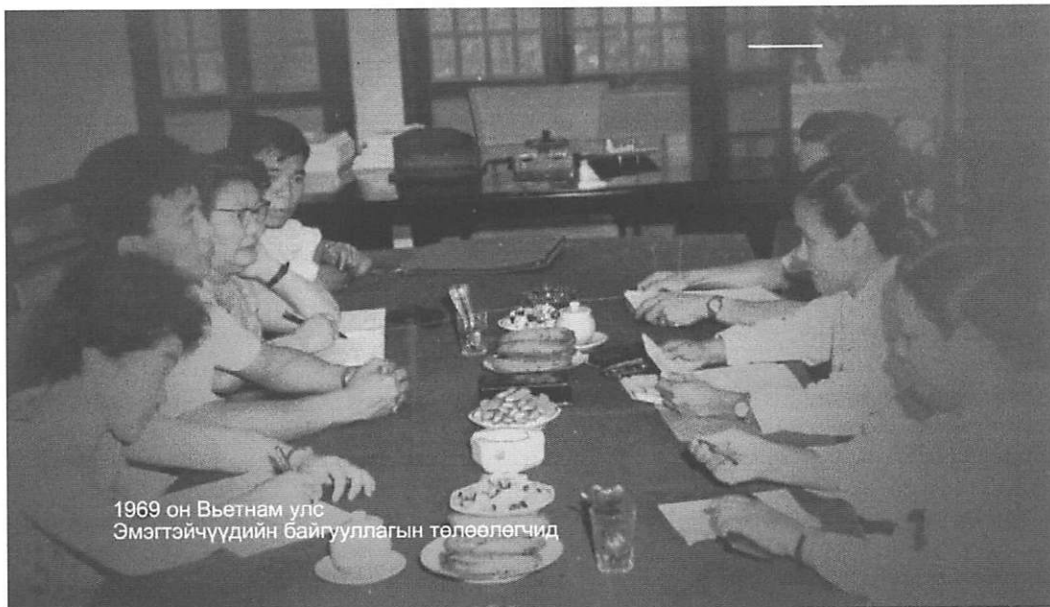
写真 15 1955 年インドのデリーで開かれたアジア諸国民会議に参加

最上列の左から 4 番目が E.チメッドツェレン。この写真の中では、男性参加者が圧倒的に多いことがわかる。



この 4 月のデリーの会議で、平和 5 原則が議論され、それを骨格とし、翌月 5 月のバンドンアジア・アフリカ会議で「バンドン 10 原則」が採択された。

写真 16 1969 年ベトナムで女性組織の代表者と会見



この番組を見たモンゴルの若い人は、E.チメッドツェレンが、40 年に渡ってモンゴル国立大学で教鞭を取り、多くの歴史学者を生み出した学者であり、モンゴル人で北京大学に留学し、博士号を習得した最初の 2 人の内の 1 人であることを知り、尊敬する先人が 1 人増えたことだろう。

筆者にとって、E.チメッドツェレンを知らないと言われてたり、文献資料を探そうとしてもアクセスできなかつたり、モンゴル帝国時代の女性を研究したらどうかとはぐらかされたり、あの突き放されたような状況はいったい何だったのか、という疑問が残る。E.チメッドツェレンは、教員として、女性組織の活動家として評価されていたが、粛清者の家族の聞き取りをしたことで研究者としては日陰に置かれたのだろうか。筆者がE.チメッドツェレンの情報を始めた頃は、マルクス主義史観に対する否定が強まり、古文書館の文献資料が公開され、領主や僧侶などの封建勢力を肯定的に捉える研究が主流になっていたのも、何を今さら、と付き合ってもらえなかつたのかもしれない。そういう時期が過ぎ、また再評価されているのが今だとすれば、この流れを大事にしたいと思う。

(5) 磯野富士子と一緒に撮った写真

番組の中では全く説明をされなかつた写真がある。E.チメッドツェレンが国際的な繋がりがあることを示すために、外国人の研究者らしき人と学会の会場らしき場所で写っている写真が数枚挿入されていた。その中で、簡易な着物を着ている女性がいることに気づき、顎のあたりに見覚えがあった。もしかすると、磯野富士子さんかもしれないと思い、モンゴル研究の先輩で、若い頃から国際モンゴル学会に参加していた芝山豊さんに写真を送って問い合わせた。

写真 17 右がE.チメッドツェレン、左が磯野富士子



写真 18 左端が E.チメッドツェレン、右端が磯野富士子



写真 19 左端が E.チメッドツェレン、右端が磯野富士子



この写真は、芝山氏によると「1970年代ではないか」ということである。

筆者が初めて磯野富士子と会ったのは、1980年代後半で、院生だった。それ以来、磯野富士子は、同じ女性のモンゴル研究者として、気にかけてくださり、大阪に来る度に美味しい食事をご馳走になった。

磯野富士子は、英文学を専攻していたが、1943年に法学者の磯野誠一の内モンゴルでの研究調査に同行することになり、西北研究所の所員となる。帰国後、『冬のモンゴル』¹⁰を書いた。革命前の封建時代の内モンゴルを知る数少ないモンゴル学者である。フランス人のオウエン・ラティモアのモンゴル学研究所の主任研究員となる。二人は、ソ連共産党に唆されたのではなく、モンゴル人自身が自由を求めて運動し、そのエネルギーが革命を生み出していったという視点を共有した。磯野富士子は、ラティモアの著書の日本語訳にとどまらず、自分の調査研究も本にまとめたが、岩波新書の『モンゴル革命』は、筆者が1年生の時、初めて手にしたモンゴル関係の本であった。

磯野富士子がよく語ったことは、「みんなが、もうわかったと思っていることは、むしろ疑って、もっと知ろうとしないといけない。」「例えば、チョバルサン元帥は、独裁者と言われているけれど、彼の文章を読んで見ると、井戸を掘るという時も、川や丘の位置から幕営地の位置、遊牧民の土地利用を想定して、自分のことのように考えていたことがわかります。」ということだった。

E.チメッドツェレンの弟子たちが思い出す師匠の言葉にも、通じるものがある。磯野富士子とE.チメッドツェレンが並んだ写真は、筆者にとって、二人の育ての母と再会したような温かさを感じるものだった。

また、女性学で磯野富士子というと、第二次主婦論争に火をつけた「婦人解放論の混迷—婦人週間にあたっての提言」¹¹や「主婦労働についての一つの疑問」¹²の著者と紹介する方がわかりやすいだろう。

日本の女性学において、女性が盛んに行った主婦に関する論争、母性に関する論争は、E.チメッドツェレンが書いた本には書かれていない。おそらく女性連盟では、女性たちによって議論されていたに違いない。今度、モンゴルに渡航したら、古文書館で女性大会関連の資料を読みたいと思う。

おわりに

この番組のJ.オランゴアの発言のところで、E.チメッドツェレンが、粛清の遺族となった、知識人として著名な女性にインタビュー調査していることがわかった。粛清について調査はしていたが、全く書かなかったのだろうか、と疑問に思い、改めて著作を読み返してみた。すると、モンゴル女性連盟の最初の代表であり、最初の国会議員であり、憲法草案の作成にも関わったにもかかわらず、“Пагмадулам хар тамхичин байсан. Ясчин хятадтай суусан”（「パグマドラムは大麻の常習者だった。」）、「高齢の漢人などと暮ら

¹⁰ 磯野富士子（1986）『冬のモンゴル』中公文庫

¹¹ 磯野富士子（1960）「婦人解放論の混迷—婦人週間にあたっての提言」『朝日ジャーナル』2(15)(57)、P.P.14-21

¹² 磯野富士子（1972）「主婦労働についての一つの疑問」、『現代のエスプリ』No.56、P.123-135

した。」)と言われ、語ることもタブーとされてきた D.パグマドラムという女性がいる。E.チメッドツェレンは、1973年発行の『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』の中で、彼女について非常に詳しく書き記していたことに気づいた。D.パグマドラムの名誉回復の動きは、筆者の知る限り、D.ニャマーが2009年に“Их Д.Нацагдоржийн гэргий Пагмадуламын амьдрал, аж төрөл” (文豪 D.ナツァグドルジの妻、D.パグマドラムの人生と暮らし)を出版したことに始まる。これは重要な発見なので、次の課題としたい。

J.ボルによると、モンゴル国立大学は、E.チメッドツェレンに関する本を2冊、出版することを公表したと言う。この番組も影響したのだろう。また、E.チメッドツェレンに関する情報が増え、そこから新しい世界が見えるだろう。とても楽しみである。

写真 20 西欧に留学中の D.パグマドラム



出所: 1924 он: Монголын Эмэгтэйчүүдийн Холбоо байгуулагдсан түүх 「1924年:モンゴル女性連盟を設立した歴史」2021年8月2日

<https://www.sonin.mn/news/culture/123359>